

# SDGs・パリ協定時代に「報徳思想」を学び直す —今こそ求められる“一円融合”と“万象具徳”的精神—

主席研究員 河原林孝由基

## 1 道徳なき経済・経済なき道徳

「道徳のない経済は悪、経済のない道徳は戯言」江戸時代後期に活躍した農政家・二宮尊徳(金次郎)の教えである。その功績はここで記すまでもないが、疲弊した農村の復興に尽力した人物であり、教えを実践する「報徳社」は、大原幽学による「先祖株組合」と並んで、日本の農業協同組合(JA)のルーツとされる。「道徳経済一元論」とも呼ばれるこの教えは道徳と経済の調和を旨とし、尊徳が説いた数々の教え(行動と実績)は「報徳思想」として体系化され、各地で報徳社(1843年に下館信友講・小田原報徳社を創立したのが最初)が誕生し、全国に広まった。

報徳思想は奥が深く本稿の紙幅で語れるものではないが、その精神性は格差拡大や貧困、気候変動といった困難に直面する現代社会に通じ、課題解決へのアプローチ方法としての示唆にも富む。そこで、現代社会が抱える課題と対比しつつ、その思想の持つ現代性・普遍性の一端に触れてみたい。

静岡県掛川市にある公益社団法人「大日本報徳社」は尊徳の教えを実践し全国に広める



公益社団法人「大日本報徳社」(筆者撮影)

報徳社運動の拠点である。正門の左右の門柱にはそれぞれ「経済門」「道徳門」と刻まれており、尊徳の教えを体現している。

奥にある大講堂(国指定重要文化財)は日本で最初の木造公会堂とも言われる建物で、明治以来、現在でもなお報徳思想の教化と普及を図る「常会」が開催(通算144年・1,740回、2020年10月現在)されている。

## 2 『新成長戦略』

「新自由主義」の流れをくむ、わが国を含む主要国の資本主義は、行き詰まりを見せていく。環境問題に対する世界的な関心の高まりに加えて、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大を契機として、「株主至上資本主義」のもとで進行していた格差が浮き彫りとなった。従来の資本主義が「大転換期」を迎えているという認識に立ち、新しい、サステイナブル(持続可能)な資本主義のかたちを追求しなければならない。

以上は、2020年11月に日本経済団体連合会(経団連)が提言した『新成長戦略』の時代認識(取りまとめの背景)である。提言のタイトルには、これまでの成長戦略の路線にいったん終止符『。』を打ち『新』しい戦略を示す意気込みが込められているという。経済界は、資本主義社会の主要なプレイヤーとして、事業活動を通じ、多様な主体との関わり合いのなかから「価値」を協創・提供し、環境問題や経済的格差等の課題解決に、これまで以上に積極的に取り組む責務があるとしている。

15年に国連サミットでSDGs(エスディージーズ、Sustainable Development Goals:持続可能

な開発目標)が採択され、続くCOP21(国連気候変動枠組条約第21回締約国会議)で地球温暖化対策の国際的枠組協定「パリ協定」が採択されて世界は様変わりした。19年には米国の経営者団体「ビジネス・ラウンドテーブル」がそれまでの株主第一(短期的な株主利益の追求)から、地域社会や従業員など全ての利害関係者に配慮する「ステークホルダー資本主義」への転換に署名し、20年の世界経済フォーラム年次総会(いわゆるダボス会議)では「ステークホルダーがつくる持続可能で結束した世界」がテーマとなった。ちなみに、21年のダボス会議のテーマは「幸せ中心社会へのグレート・リセット」である。

### 3 一円融合と万象具徳

SDGsの17目標は、経済、環境、社会の広範な分野に及び、それぞれの目標は芋づる式に絡み合い階層構造になっている。そのなかで「環境」は全ての目標の土台となり、その恵みの上に「社会」が成り立っており、さらにその上に「経済」がある。その一方で「環境」「社会」を長期に持続可能なものとするには、それが「経済」面で持続可能であることも重要である。

これは、「環境」「社会」が人々の道徳に支えられるものとすれば、それと経済との調和を説く尊徳の教え「道徳経済一元論」にほかならない。報徳思想のなかに“一円融合”という考え方がある。人は自分だけの立場から一方的にものを見て都合のよい半円の世界にとらわれていると、対立する他の半円に立つ人の立場が見えなくなる。物事の真の姿を見分

(注)詳しくは河原林孝由基(2020)「2020年を迎えるにあたり2015年を振り返る—SDGs時代にパリ協定がいよいよ本格スタート—」『農中総研 調査と情報』web誌、1月号を参照のこと。  
<https://www.nochuri.co.jp/report/pdf/nri2001re11.pdf>

けるには様々なものの両面、一円を見ることに努めるべし(“一円觀”)と説く。

一見対立・背反するものであっても互いに働き合い一体となって結果があるのである。尊徳はあらゆるものには「徳」(良さ、取り柄、持ち味)が備わっている(“万象具徳”)と捉え、立場が違うものでもそれぞれが持つ「徳」を認め合い生かし、社会に役立てていくことでより良い社会をつくる、「徳を以て、徳に報いる」ことの重要性を説いた。つまりは報徳である。

### 4 SDGsと「報徳思想」

世界は格差拡大や貧困、気候変動といった経済・環境・社会的課題が複雑に絡み合う困難に直面し、その課題解決の枠組みとしてSDGs・パリ協定に期待が集まる。SDGsの目標達成は株主第一の経済一辺倒では成しえず、「経済×環境×社会」的課題の統合的・同時解決のアプローチが必要だ。それには様々なステークホルダーを包摂することが重要であり、SDGsでは地球上の“誰一人取り残さない”ことを誓っている。

尊徳の説く“万象具徳”は人に限った概念ではなく生きとし生けるもの、否、森羅万象に「徳」を見いだす。一見対立・背反するものがぶつかり合うなかでそれぞれの「徳」を見いだし、“一円融合”的見方・考え方をもって課題解決の最適解を導き出そうと懸命に努力する。

SDGsの取組みを一過性のものとはせず、地域に根ざしたものにするには、地域の一人ひとりが当事者として主体的に取り組む必要がある。社会のあり様を考え、取り組む意味を本質から理解する。今、報徳思想を学び直すことは、その大きな助けとなるだろう。

#### <参考文献>

- ・福住正兄(原著)、佐々井典比古(訳注) (1958)『訳注 二宮翁夜話 上/下・富国捷径(抄)現代版報徳全書8・9』一円融合会

(かわらばやし たかゆき)